

東海道品川宿

品川宿の成立

徳川家康は、江戸と各地を結ぶために諸街道を整備し、宿場を設けました。慶長6年（1601）、東海道の各宿場に輸送用の馬と人足を常備させました。この頃の品川宿は、北品川宿と南品川宿から成り立っていましたが、享保7年（1722）、北品川宿の北側に歩行新宿^{かちしんしゆく}※が加わり、以後、3宿で宿場の任務を果たしました。

※歩行新宿：人足を提供する義務のみを請け負いました。その義務を歩行夫役^{かちぶやく}というため、この名称で呼ばれます。

品川宿の役人

名主^{なぬし}は、村政全般を司った役職で、主に土地の有力者が代々受け継ぎました。品川宿のうち、南品川宿の利田家^{かがた}、北品川宿の宇田川家^{うだがわ}、南品川宿に属した南品川獵師町^{おおしま}の大島家がそれぞれ単独で名主を受け継ぎました。歩行新宿^{いいた}は飯田家^{いいた}と名村家^{なむら}が勤めましたが、後に飯田家が単独で受け継ぐようになりました。

宿場の役割

東海道の各宿は1日に人足100人、馬100匹までを提供する義務がありました。その業務を司る問屋場では、問屋^{といや}（宿の長）、年寄^{としより}（助役）、帳付^{ちょうづけ}（書記）、馬差^{うまさし}、人足差^{にんそくさし}などの役人が勤務していました。馬差は馬に荷物を配分し、人足差は人足に駕籠^{かご}をかつがせたり、荷物を配分したりしました。品川宿の問屋場には荷物の重量を検査する貫目改所が置かれていました。

旅の発達と助郷^{すけごう}

定数を超えて人馬を提供しなければならない場合には、近隣の村々から人馬を集めました。これを制度化したのが助郷です。品川宿の助郷村は、享保10年（1725）では57ヶ村に及びました。各地の大名^{だいめい}※が所領と江戸を行き来することは農繁期に多く行われ、村にとって重い負担となりました。

※大名：1万石（1石は大人一人が1年間食べられるだけの米を生産できる土地）以上の所領を有し、江戸幕府に忠誠を誓った武士。一定期間ごとに所領と江戸を行き来する義務や、軍事の義務を負いました。

東海道を行きかう人々

東海道を通るのは、所領と江戸を行き来する大名をはじめ、外国の使節、将軍の飲むお茶を運ぶ集団など様々でした。一方、庶民の旅は、18世紀頃から伊勢神宮（三重県伊勢市）などの社寺を参詣することが盛んになりました。道中は徒歩で、ときおり駕籠にも乗りました。盗賊の被害や関所の通過、川の増水など、旅には困難が伴いました。

旅の費用

旅には宿泊費、お茶代、人を雇う代金、川を渡る代金、履物代、賽銭、散髪代など様々な出費があります。旅の途中で小銭がなくなると、その土地の相場で両替をしてもらいました。

江戸の郵便・飛脚^{ひきやく}

江戸時代に郵便業務を担った飛脚は、各宿場をリレー形式でつなぎ、書類、金銭をはじめとする小荷物を運搬しました。飛脚には、幕府が使うもの、大名が使うもの、一般庶民が利用したものなどがありました。商業の発展とともに、通信、送金の地域も広がりました。

べにえうり 紅絵売

紅絵は、墨一色の版画に、紅を筆で色づけしたもので、浮世絵*版画の一種です。この人形は、享保年間（1716～36）ごろ、紅絵を売る行商の姿を描いた絵から復元したものです。背中に荷箱を背負い、その上に吉原^{よしわら}（現在の東京都台東区）の大門^{おおもん}などの模型をのせ、手には数枚の紅絵がかかった細い竹竿をもっています。

※浮世絵：役者、美人、力士、風景、花鳥など、広く世間の風俗を描いた絵画。



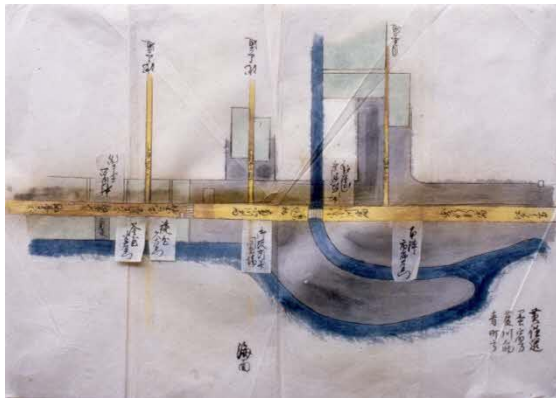
品川宿の本陣^{ほんじん}

大名、公家など身分が高い者が宿泊や休息をした施設を本陣といいます。品川宿には本陣が1軒、本陣の予備施設である脇本陣が2軒ありました。建物の特色は、一般の旅籠屋には許されていない門を構える、駕籠を横付けして出入りしやすいように、玄



関先に一段低い板敷の場所を設ける、書院造の和室を設けるといったことがあります。この模型は、文化8年(1811)に焼失した後に再建された本陣を復元したものです。現在、本陣跡地は聖蹟公園^{せいせきこうえん}(東京都品川区北品川2-7-21)になっています。

1_05_01



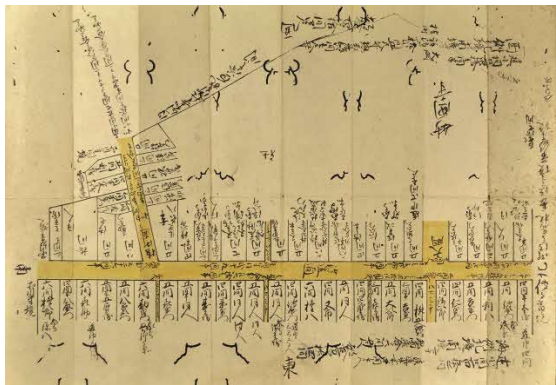
品川宿絵図（複製）

江戸時代後期（19 世紀前期～中頃）

原資料：立正大学所蔵・当館寄託

南品川宿の名主を代々務めた利田家^{かがた}が所蔵した絵図。南・北品川宿の間屋場と本陣のおおよその位置が描かれています。北品川宿の間屋場・貫目改所は、文政 6 年（1823）に焼失して以降再建されませんでした。

1_05_02



妙国寺門前明細絵図（複製）

文化 4 年（1807）12 月以降成立

原資料：立正大学所蔵・当館寄託

南品川宿の名主を代々務めた利田家^{かがた}が所蔵した絵図。品川宿には八ッ山下と妙国寺門前の 2 ヶ所に、町村の境界の目印となる柱が建てられました。それを榜示杭^{ぼうじくい}といいます。

1_05_03



五街道と四宿の図

江戸から各街道への出入口に位置する、日光・奥州道中※¹の千住宿（現在の東京都足立区）、中山道※²の板橋宿（現在の東京都板橋区）、甲州道中※³の内藤新宿（東京都新宿区）、そして東海道※⁴の品川宿の4つの宿場を総称して「江戸四宿」といいます。

※1 日光・奥州道中：日光道中は、江戸から日光（栃木県日光市）を結ぶ街道。奥州道中は、江戸から陸奥白河（現在の福島県白河市）を結ぶ街道。

※2 中山道：江戸から草津（現在の滋賀県草津市）を結ぶ街道。

※3 甲州道中：江戸から下諏訪（現在の長野県諏訪郡下諏訪町）を結ぶ街道。

※4 東海道：江戸から京都（現在の京都府京都市）を結ぶ街道。

1_05_04



中原往還図（複製）

江戸時代

原資料：安藤家所蔵・川崎市市民ミュージアム寄託

江戸城虎御門（現在の東京都港区）から東海道平塚宿（現在の神奈川県平塚市）をつなぐ中原往還（中原街道）を中央に、東海道を海側に、大山街道を山側にそれぞれ描きます。

1_05_05 	想定復元 CG「東海道」 制作：フジテレビタイムトリップビュープロジェクト（当館協力） フジテレビが制作をすすめる「タイムトリップビュー」の一風景として復元されました。東海道の賑わいの様子を、海側から眺めています。
1_05_06 	東海道分間延絵図 拾三巻之内巻（複製） 文化3年（1806） 原資料：郵政博物館所蔵 江戸幕府が五街道とそれを補助する街道の状況を把握するために作成した測量絵図です。街道の縮尺は1,800分の1で、といや問屋場・ぼ貫目改所・かんめあらためじょ本陣・ほんじん脇本陣・わきほんじん高札場など宿場の主要施設をはじめ、寺社、小道、町名、地中に埋設された排水路、石橋などが詳細に描かれています。
1_05_07 	品川宿高札（想定復元） 品川宿の高札を写した資料から、高札場に掲げられた人馬の賃金を記した一枚を想定復元したものです。高札は、様々な法令や禁則を伝達するために掲げた板の札のことです。宿場には人や馬の利用料金を記したものもありました。高札を掲示してある場所を高札場といいました。品川宿の高札場は目黒川にかかるさかいばし境橋（現在の品川橋）の北西詰にありました。

1_05_08



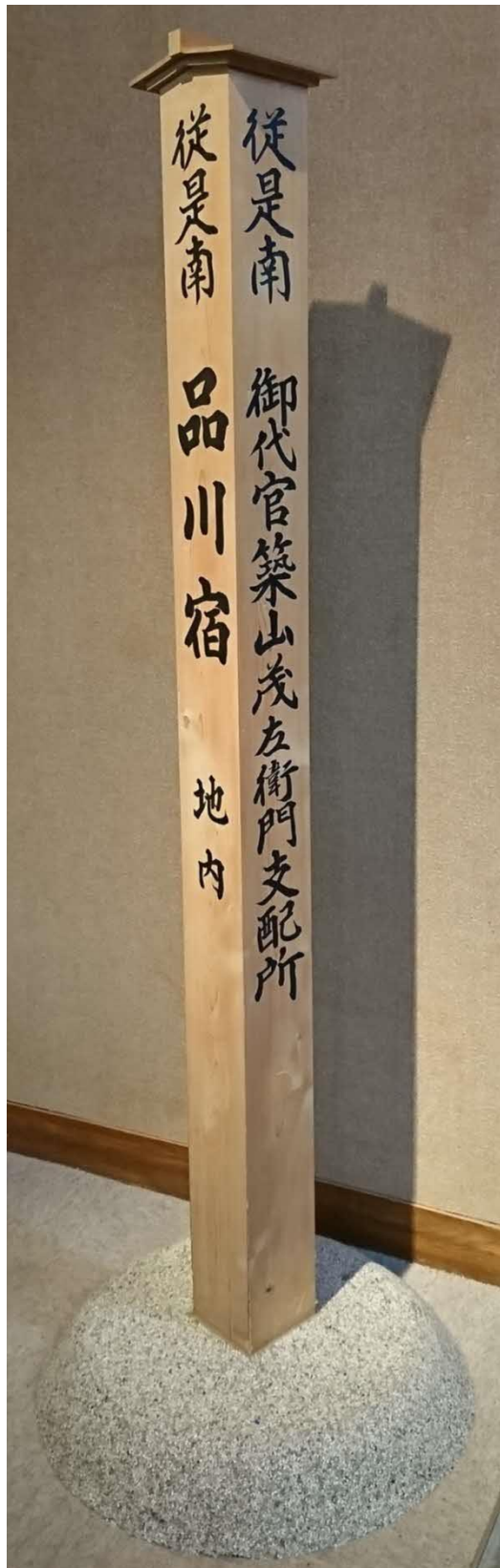
せきふだ
関札

江戸時代

関札は、大名や公家が本陣に宿泊、あるいは休息に立ち寄った時に、宿泊者を記して本陣の表門に掲げたものです。この関札は、^{あきのくに}安芸国広島藩（現在の広島県広島市周辺）の藩主だった浅野氏（松平氏）が東海道のとある宿の本陣に休泊した時のものと伝えられています。

ただし、宿泊年、宿泊地など詳しいことはわかっていません。

1_05_09



ぼうじくい
榜示杭（復元）

榜示杭とは、宿や村など領地の境を示す杭のことです。この榜示杭は、品川宿の北側入口に設置されたもので、品川宿の模型と同時期の弘化2年（1845）頃を想定して復元しました。初代歌川広重が天保4年（1833）頃に描いた「東海道五十三次之内 品川 日之出」の中にも描かれています。文化3年（1806）に成立した「東海道分間延絵図」によれば、このほか品川宿沿いの傍示杭として、南品川宿四丁目と妙国寺門前町の境、海晏寺門前町と大井村の境にも設置されていたことがわかります。

正面：是れより南 品川宿 地内

左：弘化2年（1845） 月

右：是れより南 御代官※築山茂左衛門支配所

※代官：地方の行政官の職名。

1_05_10



品川宿の家並

品川宿の家並みは、^{たかなわまち}高輪町（東京都港区）との境から妙国寺門前町との境まで続いていました。この模型は、弘化2年（1845）頃の絵図をもとに、目黒川を中心に東海道に面した家並約500mを復元したものです。床には、品川宿に並んでいた店舗の名前が書いてあります。